

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

たまゆら夏幻。

光野中学校一年

大畑 おおはた

凜香 りんか

夢のようで、幻のようなその日々は、紛れもない真実だった。どこにでもあるような、でも不思議なボクの、暑い三日間。

「あつーい」

数分前にここに着いて、きつとそれ位しか言っていない気がする。

今まで三時間のバスに揺られ、降り着いた地を見渡せば、人っ子一人見当たらない。ただあるのは、ボクの隣にポツンとたたずむ錆びれたバス停の目印。そして向こうに見えるのも、色が落ちてほとんど焦げ茶色に錆びているガードレールがボクの視界の端以上に続いている、それだけだ。背後には、熊が今にでも出てきそうな程の広大な山の麓が広がっていた。

ここに来たのは、一体何年振りだったのだろうか。随分と遠い昔のような気もするが、多分、おばあちゃんが亡くなった五年前が最後だったのかもしれない。九歳のボクにとつて、大好きなおばあちゃんが急に居なくなつたという事実は、余りにも重すぎた。それ以来、この田舎には行こうとしなかった。最初こそ、おばあちゃんの居ないのが寂しくて、悲しかったからだと思うけど、段々と成長していくに連れて、忘れていったのも本当だ。脳内の片隅に、申し訳程度に置いてけぼりにしていた。

蟬の大合唱に、顔をしかめる。青を喰い尽くすが如く、入道雲がモクモクと上っていく。

ここには、遮る物が一つとしてないから、そのどれもが我こそがとばかりに押し寄せて来るようで頭が痛くなる。勿論、頭上に今日も有難く、否、鬱陶しい程に照りつける太陽のせいで痛くなるのもあるのだが。

ボクは黒色のキャリーバックの上に座り込んだ。ポケットに入っていた携帯を取り出してディスプレイを見てみると、着いてからまだ五分程しか経っていない。この山奥じゃ、携帯も繋がらないし、どうやって時間を潰そうか。ボクは深く溜め息を吐いた。

「だから、来たくなかつたんだってば」

ポツリと呟いた声は、蟬の聲に掻き消された。再び、小さく息を出した。

すると、遠くの方から車の走る音がして、ボクはキャリーバックから立ち上がった。程なくして、白色の軽トラックがバス停の前に止まった。窓が開いて、そこから顔を覗かせたのは、ボクのおじいちゃんだった。

「おかえり。葵」

久し振りに耳にしたおじいちゃんの声は、五年前と変わらず、もう七十歳を超えているとは思えぬ程、低くてよく通る、どことなく威厳をばらんだ声だった。

ボクは少々恥じらいながらたがいま、と返した。おじいちゃんは喜んでいいのか解らない表情をしながら、ん、と唸るように声を出した。やっぱり、全然変わってなんかなかった。元々、口数が少なく、厳格なおじいちゃん。お父さんはそんなおじいちゃんの血を強く引いているらしく、家でもまあおじいちゃんのように厳しい。そして、現在では珍しくもある家庭の全ての実権を握っている。それ故、仕事人間で、急な仕事が入ってボクとの約束を破られてもボクは文句一つ言えなかった。

父と遊んだ記憶も、今では幼き頃のかすんだ思い出だし、それに最近、母も仕事をし出して家ではボク一人で居る事も多くなったから、まともな会話すらしていない。

だからどうしても、おじいちゃんとは気まづくなりやすい。

ボクはおじいちゃんの助手席に乗って、シートベルトを締めた。エンジン音がして、軽トラックは走り出す。坂道を下る時、荷台に乗せたキャリーバックがガタゴトと音を立てているのが、無音の車内に虚しくも響き渡った。気まづくて、居心地が悪すぎて息が詰まりそうで苦しかった。

「中学は楽しいか、葵」

ボソリと、まるで一人言のようにもとれる声の主はおじいちゃんだ。ボクは驚いて、蛙が潰れたような、変な声を上げた。

「え、ああ。うん、まあ…ね。楽しい、よ」

曖昧な返事をする。ぎこちないボクの言葉に何拍かあけてから、おじいちゃんはそうか、と小さく頷いた。

そしてまた、あの静寂が流れた。何となくボクは逃げるように視線を外へと向ける。ボクは目を丸くした。この窓から見える範囲全て、山と畑と田んぼで埋め尽くされていたからだ。ダメだ、気がおかしくなりそう。ボクは窓の外を見るのは諦めた。

「着いたぞ」

低くてすんなりと耳に入り込むその声に、ハッと目を見開く。この静けさといつまでも変わらない景色にどうやらうとうととしていたようだ。半分はもう夢の中に居た。

ボクは少し醒めない目をこすりながら、車を出る。おじいちゃんが荷台からキャリアバックを降ろしているのを尻目に、目の前に堂々とそびえ立つおじいちゃんの家を眺めた。こんな大きい家で、一人で暮らすのはどんな気持ちなんだろう。

ボクは辺りを見回した。

この家よりも小さいが、何だかとても年季の入った木製の蔵がひっそり、家の陰に隠れるように立っている。そして、おじいちゃんが昔から大事にしている日本庭園が、今日も変わらず綺麗な姿でボクの後ろに広がっている。後は…何も無い。ここは山の中に造られた家で、まあ道路とかは一応整備されているんだけど、ここから町に出るには大分時間がかかるし、町に行ってもあるのは、小さな個人商店くらい。コンビニもないんだっけ。

徐々に思い出されてくこの田舎の記憶に、ボクは今日三度目の溜め息を吐く。

こんな所で、どうやって遊んでたんだっけ、ボクは。

すると、こうべを垂れていたボクの肩をトン、と叩いて、おじいちゃんはまだ、おかえりと迎えてくれた。

早く帰りたい。こんな田舎。

そんな気持ちが勝つてか、ボクはただいまという言葉を濁すように苦笑しただけだった。

ああ、暑い。額を流れた汗を拭いた。

玄関は、何でだろう。五年前よりもずっと広く感じた。そして、あつとボクは声を上げた。おじいちゃんはどうかしたのかとでも言いたげに眉をひそめた。

「みんな、来ないんだね」

そっか、今まではこのお盆の時期は親戚一同が揃っていたのに。誰も、来ていなかった。あんなにもうるさい程騒いでいたのが嘘のように、静まり返って、どこからかなる風鈴の音が虚しくも響いていた。

「ああ、四年前の冬頃から…誰も来てない」

無表情だった。おじいちゃんは、今も昔も、ずっと、無表情だった。でもどこか、そのおじいちゃんの横顔は、ちょっと寂しそうに見えた。胸がギュッと締められるように痛くなるのを、唇を噛んで抑えた。

こんな大きい家に、ずっと独りぼっちだったんだ。まるで、おばあちゃんの居ないただ不便だけの田舎は用無しだ、とでも言わんばかりだ。

おじいちゃんはボクのキャリアバックを持って、家の中へ入っていく。五年前よりも寂れたように見えるおじいちゃんの背中に、鼻がツンと痺れるように痛くなった。ボクは呆然とその場で立ち尽くして、涙が出そうになるのを堪えた。

確か、ここに来たのは、ボクの中一の頃の荷物を置いておくためだったか。お父さんの転勤で転校を余儀無くされたので、引っ越しする際に邪魔になった物をここに預けに来た。

もうそんな理由でしか来なくなつて、本当に時の早さを実感する。

「葵、どうした。入りなさい」

おじいちゃんが、階段を降りながら言った。

「ボ、ボク。ちょっと出掛けて来るっ」

言うが早いのか、返事をまたずにボクは外へ駆け出す。どうしてボクは

家を出たんだらうか。よく解らない。自分の真意が解らない。解らないけど、玄關のすぐ右隣にある部屋の襖ふすまの隙から見えてしまった。仏壇に置かれたおばあちゃんの写真を。それが酷く痛烈に脳裏に入り込んで、鈍器で頭を殴られたような感覚で痛くなった。

山を下って、畦道あぜみちに出る。見た事のない景色に一度たじろぐが、また走り出す。風が頬をすり抜ける度に目頭が熱くなっていく。

変わっていく風景に吞まれそう。みんな、変わった。ボクも、おじいちゃんも、親戚の人達も、みんな。遠い記憶の中で、蘇るものなんて、今更もう無い。きつと、蘇らせる事もできっこない。楽しかった記憶は、霧がかかったままなのが、酷く悲しくて。

「あれ…。ここ、どこだ」

何分、走っただらうか。一瞬でこの見た事のない河原に来たのかもしれないし、何日かかけて移動して来たのかもしれない。ただ、本当にここはどこなんだらう。

不意に、言い知れない恐怖と不安と、後悔に目が眩む。知らない所は、やっぱり怖い。一人は、やっぱり怖い。戻ろうとしても、自分がどうやってこの河原に来たのか覚えていない。まるで導かれるように、自然と足が動いていた。

大分、下流の方まで来たんだらう。川の流れば幾分緩やかだし、付近には砂利も見える。

ボクは土手を駆け降り、河原に出る。川を覗くと、地面が見えるまでに透き通っていた。そこに手を浸すと、その手から徐々に冷気が全身を駆け巡っていった。脳をクリアにしていく。煩わしい蝉せみの声も、思考も、暑さも、寂しさも、涙も。全部洗い流してくれのような気がした。

「その川、気持ち良いよね。凄く綺麗で」

背後から、そんな涼しげな声にボクはビクリと肩を揺らした。恐る恐る、後ろを振り返ると、そこには声に似合う程に涼しい顔をした、ボクと同じ年くらいの男の子が立っていた。

「僕も毎日来るんだよ」

隣にボクと同じようにしゃがみ込んだ男の子は、川に視線を向けたまま、微笑んだ。

ボクはいきなりの出来事に、頭が追い付けずにいた。いつからこの男の子は居たんだらう。と言うか、そもそも彼は一体誰なんだらう。

「ふふ。凄く困惑してる顔。僕の事、知らないの。覚えてない」

色素の薄い男の子は、病弱そうな華奢きゃしゃな体つきに、蒼白の顔色。だけど、ボクに向けて微笑んだその顔は、同性のボクでも胸がドキリと鳴る程に目鼻がくつきりとした整った顔をしていた。いわゆる、美男子と言う奴だ。

「本当に、覚えてないんだね」

ハツと息を呑む。容姿に気を引かれて、全く考えてなかったが、ボクの親戚の中にこれ程までの美しさを誇る人は居なかったはず。友達にも、居ない。居たとしたら、絶対にこんな美男子は記憶にしっかりと刻まれているだらう。あらゆる可能性を考えても、やっぱり居なかった。

悲しそうに眉を下げる彼に、何だか凄く申し訳なくなってきた。

「す、すいません…」

「ううん、いいんだ。僕はちひろ。知能の知に、宏大の宏。で、知宏」
空中に指で知宏と書いていく。そのすらりと長く伸びた白い指を目で追った。

「えっと、ボクは…」

「葬。だよ。僕、知ってるよ、君の事」

ボクの言葉に被せるように知宏くんは言った。

ボクは、口をあの子に開けたまま、固まってしまった。知宏くんはボクの間抜け面を見て、ケタケタと笑った。先程までの艶やかな微笑とは打って変わって、口を開けて笑うその姿は、年相応の無邪気さとか、どこか幼さもあった。

「年は僕と同じ十四歳。合ってるよね」

「え、あ……うん」

「またもや、知宏くんは当たりでしよ、と言わんばかりに目を輝かせてそう聞く。ボクは半分疑わしい目でそんな知宏くんを見ていた。」

「僕、葵の事知ってるよ。住んでる場所も、趣味も」

「恐ろしい程、無垢に。穢れを知らぬような灰色の瞳の中にはボクがポカンと口を開けて呆然とした姿が映っていた。」

「口角を不自然に上げて、ボクは暑さなのか、それとも違うもので汗が出るのか、額に流れた一筋の雫を右腕で拭いた。知宏くんは未だ、あの純粹な笑みを深めたままだった。」

「知宏くん、は……何者なの」

「知宏くんは、目を見開いて驚いたように口を開けていた。そして、またあのあどけなさが残るその笑顔を見せた。可笑しいとも言わんばかりに声を上げて。」

「僕は、君の友達。だよな」

「笑い過ぎて、目尻に浮かんだ涙を人差し指で拭いながら知宏くんは言った。」

「友達……か。引越して以来、出来なかつたんだな。やっぱり、こんな中途半端な時期に越してくればそんなもんか。ボクは自嘲気味に笑った。ボクは知宏くんを見つめて、小さく微笑んだ。」

「そっか。友達、だよな。ボク達」

「知宏くんは一度小指を傾げて、あの妖艶さを含んで当たり前だよ、と微笑した。」

「温かくなる。こんなにも心地好い感覚は久しぶりだった。友達、そんな響きがボクの中でこだまし続けていた。」

「あれ、もう暗くなってるや」

「ボクは空を見上げながらそう呟いた。」

「山奥だし、街灯なんて無いよ。早めに帰った方が良いね、これは」

「紫と橙が交差する空を見上げながら、知宏くんは言った。その姿が、ボクにはとても儂く見えて。ボクは何を思ったのか。否、考えるより先に、何故か知宏くんの右手首を掴んでいた。想像していたよりもずっと細くて冷たい手首に、一瞬戸惑う。」

「知宏くんは目を丸くして、少しだけ肩を上げてボクの方を見た。でも、一番その行動に驚いているのはボクなんだけれど。」

「え、あ……の、またっ遊ぼうよ」

「顔に熱が集まっていくのが解る。震える唇から漏れ出る声も、情けない震えていた。」

「言い慣れない言葉。できるだけ笑顔で言いたかったが、引きつってはいないだろうか。」

「しばらくの間、沈黙が流れた。妙な緊張感に肩が狭くなる。その静けさの間は、知宏くんがどんな表情をしていたかは解らない。言い出したのは自分のはずなのに、恥ずかしさで俯いてしまったから。」

「すると、ふはつと、我慢していたものを吹き出すような息が聞こえて、顔を上げる。知宏くんは顔を真っ赤に染めて、くくくと喉を鳴らすと今度はとうとう笑い出した。大声を上げて。あの、何か取り繕うような笑顔じゃなくて、無邪気でただ純真な少年の笑顔だった。」

「藍色に染まりゆく空に響く笑い声に、ボクは立ち尽くして知宏くんの右手首をギュッと掴み直す他なかった。一体、何が起こったのか整理できない。」

「はは……ごめんね。ただ何か、遠慮されてる感じがあつたから、ちよつと嬉しくて。うん、葵。またここだね」

「遊ぼう、と、知宏くんの声が聞こえた時、ボクは肩から空気が抜けていくように下ろした。胸をホッと撫で下ろす。」

「確かに今日半日、会話はほとんど知宏くんが持っていてくれた。壁をつくっていたのも本当だ。まさか、気付かれていたとは。でも、川の上流へ行ったり、この町の事を聞いたり案内されている時は、素直に楽し

かったんだ。胸が温かくなって、心のしこりが柔らかくほめてゆくのうな感覚が嬉しかったんだ。

それだけには、嘘をつけなかった。

まだ一緒に居たいと思っただけ、これからも遊んで居たいって、純粋にそう思えた。

ボクは固くなっていた口許を緩めて、綻んだ。このふわふわとした感情に名前をつけるとしたら、そうだな。嬉しい、だ。

「またね」

物悲しいように知宏くんの手首を解放して、ゆるゆると手を振った。

知宏くんも頬は紅潮していて、安心したようにはにかんだ。

手を大きく振って見送られるのは、何年振りかな。ボクは知宏くんが小さくなるまで手を振って別れを惜しんでいた。

知宏くんが見えなくなると、ボクは大事な事を思い出して立ち止まった。

「家…どこだっけ」

ただひたすら走って来たから、よく覚えてないんだ。血の気が引いていくのが解る。ボクは何て馬鹿なんだ、と心で自分の事を怒鳴った。

かのおとぎ話のように目印を置いて行った訳でもないし、それに田んぼが延々と連なっているから、これと言って目立つ物もなかったし。

今更どうしようもない後悔に頭が痛くなってフラフラとおぼつかない。

「ふふ、やっぱりねえ」

クスクスと、嘲笑するような声が聞こえて、ボクは息が詰まりそうな程、心拍数がバクバクとして驚きが隠せなかった。

後ろを振り返ると、先程別れたはずの知宏くんが立って居たのだ。悪戯っ子のような笑みを浮かべながら。

「ち、知宏くん。どうして居る、の」

「ん、どうしてかな」

少しだけ笑いを含みながら知宏くんは言った。

「ただ、今頃迷ってるんじゃないかなって思ってた来てみたら、予想通りだったよ」

その艶やかな微笑みは、一体何を意味しているの。触れられない何か知宏くんには有るようで、背中に寒気が襲った。

いつでも、一歩手前に行く君は、本当に何者なんだ。

うやむやな疑問が、脳裏から離れない。

「君は…本当に一体…」

「さて、暗くなってきたし。帰ろうか」

ボクの言葉を遮るように知宏くんは言った。にっこり、そんな表現がまさに似合うように笑いながら。その笑顔が、ボクには酷く恐ろしいものに思えたのは何故だろう。

「ボクの家、知ってるの」

「ここら辺の地理は詳しいからね、僕」

知宏くんは急かすようにさっさと歩き出した。月明かりが照らす道に、君の陰は無かった。

それ程歩く事もせず、多分四、五分程度でおじいちゃんの家に着いた。

玄関の電気が扉越しに漏れ出している。

ここまで着いて来てくれたお礼と、別れの言葉を伝えようとして、ボクの後ろに居る知宏くんの方へ振り返る。

「…え」

目を疑った。何度も目をこすって、辺りを見渡しても、居ない。知宏くんが、居なかった。

「え、ち、知宏くん…」

居ない。呼んでも、呼んでも呼んでも、返ってくるのは蛙と蟬の鳴き声ばかり。

頭がぐるぐると回る。目眩がしそうな位だ。

木々が夜風に遊ばれて、ざわめく。

「葵。もう八時だぞ。今まで何処へ行ってたんだ」

怒気をはらんだ声が出て、後ろを振り返る。

玄関の引き戸がガラリと音を立てて勢いよく開いて、そこから現れたのはおじいちゃんだった。

それも、眉間に皺を寄せていて、顔を赤く上気させて、もう完全に怒っている顔だ。お父さんとやけに似ているのは、やっぱり親子なんだ。ボクはお母さん似で、どちらかと言えば女顔の方だから、おじいちゃんやお父さんのように威厳のあるたくましい男顔ではない。それにちよつとだけ、寂しくなって俯いた。

「蔡！」

怒鳴る声が鼓膜を大きく揺らした。

咄嗟に顔を上げると、すぐ近くにまでおじいちゃんは来ていた。

「…ただいま」

ボクはそう微笑んで見せた。

おじいちゃんはボクの反応が予想外だったようで、目を見開いてただ呆然と見つめていた。

ボクにも、自分が解らなかつた。あの状況であの場にそぐわない返事をしたのが、解らない。瞬間的に口をついて出た言葉が、それだった。

だけど、どうしてか先程おじいちゃんに怒鳴られた時、何故かほんの微かに、嬉しいと思えたんだ。

久し振りだった。誰かに心配されて叱られるのは。もう結構前になると思う。成長していく度に、どこか家族とは一線を引いていた。当然、会話も減っていくし、一番に帰って来るようになって、一人で過ごしていた方がずっと気が楽だった。

でも今日。知宏くんと出会って、あんなにも初めてなのに打ち解け合えたのが本当に嬉しいと感じて、こんなにも優しい気持ちになれた。

おじいちゃんが、お父さんと重なって見えた。もう、叱ってくれなくなつたお父さんが目の前でボクを見てくれている。知宏くんに会わなかつたら、こんなのだしつこいなあつて、思うだけだったと思う。人

の温もりが、孤独の怖さが、ボクの中でずっと残っていたんだ。だから、おかしいのにどうしてか嬉しかった。ボクを見てくれていた。その強い意志の瞳に、ボクが映っている。それが堪らなく嬉しくて。

大きく息を吸う。吐き出した息と共に、

「ただいま」

を添えて伝えたら、さっきまでポカンとしていたおじいちゃんは、我に返つたようにまたあの無表情に戻って、おかえりと言ってくれた。でもその声色は、どこか優しい気だった。

夕飯の間の沈黙の中で、ボクは、

「友達ができたんだ。同じ年の」

そう告げると、おじいちゃんはそうかと答えるだけだった。

それ以降は会話もなしで、正座していた足の痺れで頭がいっぱいのまま食事は終わった。でもその静寂は、車に乗っていた時よりも息苦しくはなかつた。むしろ、心地好かつた。

翌日。ボクは普段よりもずっと早くに起きた。まだ明け方で、窓を差す光が伸びをするボクを柔らかく包んだ。

寝巻きから着替えて、下へ行く。するともうダイニングにはおじいちゃんが椅子に座って新聞を読んでいた。

ボクの気配に気付いてか、おじいちゃんは新聞から顔を上げて、新聞紙をたたみながら、おはよう、としわがれた声で言った。

ボクは、朝が弱い。声すら出したくないのに、今日だけは違つた。ゆつくりと微笑んで、

「おはよう」

ボクの声なのか疑う程優しい声に聞こえた。

おじいちゃんが朝食の準備をするために台所へと向かうのを見届けると、ふうと小さく息を吐いた。

お盆の日だと言う事を忘れていた。今日はあいさつに行かないと。

おばあちゃんに。

ボクは仏壇のある部屋へ向かった。

襖すずまを開けると、線香の香りが鼻をくすぐる。おばあちゃんは、あの人の良い笑顔のまま写真の中に居た。

仏壇の前にあつた深紫色の座布団の上に正座をして、胸の前で静かに両手を合わせる。ゆつくりと目を閉じた。

思えばおばあちゃんは、いつだって笑っていた。

よしよし、って温かくて柔らかくて、皺くちやの手で頭を撫でて、ふかふかの布団よりも気持ちの良いおばあちゃんの胸の中で、ボクは何度も夢を見た。

良い香りで、安心した。おばあちゃんの胸の中は。おじいちゃんは本当に、おばあちゃんを愛していたんだなあって思う。だって、あの無口で頑固なおじいちゃんが、心を許せた人なんかもん。

そう思うと、自然と涙が込み上げてくる。

大切な人が、かけがえのない存在が、突然目の前から消えるって、どんなに辛いんだろうか。

手を伸ばしても、届かない。世界中駆け巡ったって、どこにも居ない。耳を澄ませても、その愛しい声は聴こえてはこない。

何とも虚しくて、寂しくて、哀しいんだろう。おじいちゃんは、どう思うのかな。

涙なんて、見た事もなかった。苦痛に歪める顔も、見た事もなかった。おじいちゃんは、そうやってすぐ感情を殺す人だから、よく解らない。

だけど、だけどやっぱり…

「寂しかった、よね」

チリン、チリン、って、慎ましく風鈴の音が響く。いつの間にか、夏の太陽がキラキラと輝いていた。蝉の声に、吞まれたボクの言葉を最後に残してこの部屋を出た。

写真の中でも、笑顔を絶やさないうあなたも、きつとやるせない気持ち

だっただろうな。おじいちゃん一人残して、逝ってしまうのは、ずっとずっと悔しかっただろうな。

右腕で両目をこすった。

居間へ行くと、テーブルの上には二人分の朝食が並んでいた。おじいちゃんがおひたし片手にやって来て、座布団の上に正座した。ボクも慌てておじいちゃんの前まへに正座する。

「いただきます」

静かに手を合わせておじいちゃんが言ったのを見届けると、ボクも小さくいただきます、と手を合わせた。

何も、話さない。ただ自然の音と風鈴の歌に耳を傾けながら、ゆつたり流れる時を感じた。不思議とそれが、幸せに思える。一人じゃない食事は、ほんのり甘い味がした。

「自転車なら、蔵から出しておいだぞ」

唐突に、おじいちゃんは口を開いた。ボクは一度首をかしげて、疑問符を頭に浮かべる。

しばらくして、ボクはあつと声を上げた。

多分、河原へ行く為に自転車を用意しておいたぞ、という意味なのかもしれない。

「ありがとう」

ボクは箸を止めて、おじいちゃんを見つめて微笑んだ。おじいちゃんおじいちゃんはボクの方こそ向いてないけど、小さくか細く、でも確かに、うんと頷いてくれた。

ここに来てから、何だかボクは少しおかしくなった気がする。否、正確には、知宏さんと出会ってから、だが。ちよつと優しくなったとか、余裕がもてるようになったとかいうか。別に、寛大な男になったとか、そう言う訳では毛頭ない。でも少しは、変わったかな。

自転車はお父さんが中学生の頃の物らしく、意外にも錆びついている

訳ではない。むしろ、綺麗な方だ。きつと凄く大事に管理してたんだなあと思うと頬の筋肉が緩む。缶ジュースが二本入った透明なビニール袋を自転車かごに入れる。サドルに跨ると、高くもなく低くもなく、丁度よい高さですんなりとボクの体に馴染んだ。まるで、ずっと使いこんだ物のように思える。

ペダルを勢いよく漕いだ。頬をすり切つて前髪で遊ぶ風がとても気持ち良い。ガタガタと大きな音を立てて、かごの中で缶ジュースは暴れている。

全てが、ボクを開放的にしてくれた。

覚えるというのは苦手だ。でも、新しい事を知るのは好きだった。

走って、逃げるように、現実から遠ざかるように走って景色なんて気にも留めなかった。帰りは暗くてよく見えなかった。でも今ならよく見える。

田んぼの向こうに固まった集合住宅。息もつかせぬ程、太陽の光に瞬き、まるで寶石のようにキラキラと輝く小川。全てが、一つの絵画のように鮮やかだった。

ボクは土手に着いて自転車を留めると、もう河原には知宏くんが居た。急いでかごからビニール袋を取り出す。昨日はボクが驚かされたから、

今日はボクが驚かそうかな、と野暮な事を考えながら近付いて行く。

偶然にも、今知宏くんは川を覗きこんでいる。チャンスだ、と心で喜んだ時、

「葵。おはよう」

いつもと変わらぬ透き通った声で、こちらを振り向いた。あの純粹無垢な笑みを貼りつけて。

「き、気付いたの…。いつから」

「んー、自転車を留めた頃かな」

土手にあるボクの自転車を指さしながら、にんまりと知宏くんは笑った。

予想外の出来事に、逆に驚かされてしまった。心の中で、ボクは落胆する。

「そうだ。今日は僕のお気に入りの場所に行こう。きつと、葵もすぐ好きになれるよ」

知宏くんは、思い出したように空を見上げてから言った。お気に入り場所？と首をかしげていると、知宏くんが唇に人差し指を当て、内緒だよとボクに囁いた。その姿に、不覚にも胸が脈打つ。中性的な顔立ちで、もしかしたら女性にも思える程の容姿でその仕草をされたら、多分男女関係なく頬を赤らめる事だろう。心底知宏くんが女性じゃなくて良かったと思う。

「何してるの。早く行くよ」

「え、あ。ちよつと待って」

知宏くんの姿に見入ってしまったと思ったら、いつの間にか知宏くんは土手の上に居た。

ボクは慌てて追いかけて行って、知宏くんの後ろについて歩き出す。右手には二人分の缶ジュースの入った袋を持ちながら。

数分歩いて、森の中に入る。人一人分程度が入る道の周りには、ボクの背の何倍もある木が無数に広がっていて、薄暗く感じた。

太陽が木々に遮られ、少々肌寒くも思える。

右手にビニール袋の持ち手がぐいこんで、若干痛さを感じつつも、先を行く知宏くんの背を見失わないように慣れない山道を歩く。

息が乱れて、酸素が薄くなっているのが解る。もうどれくらい歩いただろう。延々と木々が立ち並んでいるのを見ると、いつぞやの車の中で見たあの果てしなく続く田畑と同じように、頭が痛くなっていく。

「葵、葵。大丈夫かい。もう着くよ」

ボクが後ろでゼエハア荒く息をしているのを気遣って、知宏くんは一度立ち止まって困ったように眉根を下げながら微笑んだ。

ボクは右手を上げて大丈夫だよ、と合図を送る。知宏くんはごめん、

とはにかんで歩き出した。慣れているからか、知宏くんは呼吸一つ乱してはいない。ボクはこめかみの汗の粒を拭った。

「葵。ほら、着いたよ」

いきなり立ち止まった知宏くんの背中に、ボクはぶつかってしまふ。背丈は同じ位なのに、体格は知宏くんの方が細くて、今にも折れてしまふような程弱々しかった。まあボクも、知宏くんの事が言える程体格が良い方ではない。ひよろひよると頼りなく震える脚を見て思わず溜め息がこぼれた。

ボクは依然前を向く知宏くんの肩越しにその知宏くんが指さす景色を眺めた。

「わっああ…」

「ね。綺麗でしょ」

それは、思わず息を呑む事しかできない程で。絞り出した小さな感嘆の声ぐらいが、精一杯で。目の前のパノラマに、ボクは心を持っていかれそうだった。

小さな公園程の面積で、そのど真ん中には大きな大きな、周りの木々達とは比にならない大木がたった一本、地に根を這わせている。

森の中なのに、その空間だけやけに眩しく思えた。太陽の日射しが、光の筋となつて、優しく包み込むように流れ込んで来ているからだろうか。

知宏くんが、パツとボクの左手首を掴む。

ハツとボクは、我に返つたようにパノラマから知宏くんの方へ視線を向けると、知宏くんは嬉しそうに頬を色付けて、目を細めていた。

「僕のお気に入りの場所。葵も、好きになれた」

「うん。凄く綺麗だよ」

少し不安気に問う知宏くんが、いつもの余裕がある雰囲気とは違って見えたから、気づかれないようにクスリ、と笑った。ちよつとだけ、知宏くんに近付けた気がする。

知宏くんは、本当にホツとしたように息を吐いて、おいで、とボクの手首を引つ張った。

その空間に足を踏み入れた瞬間、風がふんわりボクの頬を優しく撫でた。小鳥のさえずりが鼓膜をそつと揺らす。心地好さに目を細めた。

ボク達は大木に凭れかかった。ひんやりと背中から大木の冷気で全身の熱が冷やされていく。

ボクは右手の重みに気付いて、ビニール袋から缶ジュースを二本取り出す。片方を知宏くんの手渡すと、ありがとう、と力なく微笑んだ。多分、疲れたんだろう。ボクは一人でその笑みを解釈して缶ジュースのプルタブを開きその中を喉に流し込んだ。

みかんの甘酸っぱい味が体に溶けこんでいく感覚が酷く気持ち良かった。

だけど、知宏くんは缶ジュースを地面の上に置いて、ただじつと空を見上げていた。その横顔が、昨日のおじいちゃんが見せた寂しそうな顔に似ていたのは、きつと気のせい。

「ねえ、」

突然、隣から声がかかって、ボクは知宏くんの方を見る。

知宏くんは依然として空を見つめるだけで、ボクの方を向いてはいない。ただ、その唇は、何かに耐えるように震えて見えた。

「僕、今日行くんだよ」

「え…どこに」

「みんなが、知らない場所」

「知らない、場所って…」

ボクは首を傾げた。

何を言っているんだろう、と思ったが、上の一点を見つめて逸らさない知宏くんの瞳は、痛いまでに真剣で。ボクは背中に何かが這うような感覚をおぼえた。

ボクも、明日になればこの田舎を去る。お盆の間まで、という条件を

仕方なく飲んで嫌々ながらもこの田舎に来た。しかし、たった昨日、知宏さんと出会って、大切なおばあちゃんともう一度向き合えて、ただただ嬉しくて、楽しくて、本当に来て良かったって心から思えて。なのに、やっとなんか思えたのに、今度は別れをつきつけられた。

ボクは缶を握り締めた。喉から込み上げる何かに、唇を噛んで堪える。俯いて、またギュッと拳を握った。

妙な緊迫感のある静寂の中、それを破ったのは知宏くんだった。

「もう、お別れ、だから…。だからね、葵。君に聞いて欲しいんだ」

知宏くんは、上にあげてた視線をボクへとずらす。見た事もない、知宏くんその真剣で真つすぐな表情がどうしてか怖かった。何だか、全てを見透かしているようで。

一度、すう、と小さく息を吸うと、知宏くんは唇を開いた。

「僕の事、覚えてなくても良い。だけど、だけどこれだけは決して忘れないで。…葵、君は一人じゃないよ」

目を見開く。

はらはらと、頬の上を雫が滑り落ちていく。

知宏くんは、緊張の糸が切れたように顔を綻ばせた。眉を下げて、困ったようにはにかみながらボクの涙を指の腹で拭ってくれる。

それでも、留まる事を知らない水滴は溢れ続ける。

どうして、どうしてなんだ。

どうして君は、ボクの事をそんなに解っているの。

誰かに、言つて欲しかった。ずっと、安心させて欲しかった。一人ぼっちの不安を、誰かに話したかった。ずっと、ずっと。

けれど今、その欲しいものを知宏くんは全部くれた。言葉で。優しい声で、紡いでくれた。

忘れる訳ない。こんな事。こんな、君の事。

「忘れられるっ、訳ないよ…！」

涙でかすんで見えないけれど、きつと、きつと笑ってくれたよね。「そっか…。じゃあもう、これ返すよ」

知宏くんは、そつとボクの手を掴んで、何かをそこに乗せた。ズシリ、と重みを感じる。

ボクは缶ジュースを置いて、その手で涙を拭くと、それを見る。

「本…」

一冊の本だった。

表紙は黄ばんでボロボロで、それに結構分厚い。タイトルの色も所々はげていて、読めそうにないが、現代の漢字ではなく、恐らく戦前からの字。歴史の教科書で見覚えがある。

「な、何でこれを…。ボクに」

涙がピタリと止まる。知宏くんは、今日初めて見る妖艶ようえんで意味あり気な微笑をしたままだった。

しかも、返すとは一体何だろう。ボクは知宏くんにも何もあげてないし、ましてやこの本の存在すら知らなかったつてのに。

「知宏くん…」

「じゃあね、葵。僕もう行かなくちゃ」

「えっ…あ、ど、どこに」

「…寂しくなるよ。長く居れば居る程。でも、葵には、もう止まってる時間はないんだ。だから、ね」

徐おもろに立ち上がった知宏くんに合わせてるようにボクも慌てて立ち上がる。

知宏くんは、またも空を見上げていた。その姿は、今にもこの恐ろしい程の快晴の空に吸い込まれそうに儂おぼろくて。その横顔は心なしか、泣きそうに見える。

知宏くんは大きく息を吐き出すと、こちらに向き直った。その表情は、悲しいくらいに微笑んでいた。まるで、何かを抑制するようだ。

そんな顔、しないでよ…。

「葵。目を閉じて、僕に背を向けるんだ。そして、僕が君の背中を押し
たら、すぐに今来た道をたどって、家に帰って。絶対、振り向かず」
知宏くんは、捲くし立てるように言い切ると、あの無邪気な少年の笑
顔を見せた。

綺麗なその笑顔に、止まっただけの涙が再び溢れ出す。ボクは幼い子
供のように、いやいやとかぶりを振った。

「何でっ、どうして…」

「葵、背を向けて」

「そんなの、できないよ！」

「葵！」

時が、止まったように感じた。

ボクは目を丸くした。

あの、怒気をはらんだ大声の主は、知宏くんだった。

「ち、知宏くん…」

知宏くんはバツが悪そうに、ボクから顔を逸して、ほら、とボクの肩
を押した。

あの声、あの表情。葵！と怒鳴られる声が、怒鳴る時の表情が、ボク
の脳裏でピツタリと合わさる。

おじいちゃんに、似ている…。

顔こそ、知宏くんはおじいちゃんとは違う女顔。似ても似つかない
のに、だけれど、似ていた…。

「葵、あっちを向いて」

「知宏くっ…」

「向いて」

ボクの言葉に被せて知宏くんはいつになく真剣な表情で放った。

ボクは大人しく、知宏くんに背を向けた。

服も顔も、涙で濡れている。

「ありがとう。楽しかった。君に出会えて、本当に良かった。ありがとう

う」

背後で、優しい声がかかる。嗚咽のせいで上手く息が出来ない。

「さあ、行って」

トン、と優しく、でも力強さを感じる知宏くんの掌の感覚が背中に伝
わって。

足が、動き出す。右手の中に、本の感触を確かめて。ボクは、走り出
した。

「葵ーっ頑張れー」

知宏くんの声を、背で受け止める。わんわん泣き喚いても、足だけは
ずっと動かし続けた。

「…兄さんに、よろしくね。葵」

君の声は、その空に溶けていく。

ボクの耳に届かなかった眩きが、光の粒と共に消えた。

息が乱れる。足が痛くてもう感覚がない。

止まった涙が乾燥して、目がヒリヒリと焼けるように痛い。思わず倒
れ込んだのは、偶然にも土手の上。ボクの自転車が、ポツンと取り残さ
れている。

右手の中の存在を確かめると、それをかごに入れ、サドルに乗る。

ちらつくのは、知宏くんとの思い出。

たった昨日、出会ったばかりだったのに。

否、時間なんてどうでも良かった。ただ、君と居られれば、良かった。

ハンドルを握り締める。もつと話したかった。もつと遊びたかった。

もつと、もつと…。

涙の代わりに、溢れ出す想い。もう君には、届く事はない。一生の別
れ、のようだ。そんな事一言も言っていないのに。だけれど、そう思えて
仕方ない。

見えてきた家に、何故か酷く安堵する。

ボクは家の前に自転車を留め、引き戸を開ける。

「おじいちゃん！」

大声で玄関から叫ぶと、何事だと言わんかりに上の方でドタバタと音がして、階段を駆け下りてくるおじいちゃんの姿があった。

おじいちゃんはボクを見つけると、またいつもの無表情でおかえり、と言ってくれた。

「…葵、君は一人じゃないよ」

不意に、そんな声が思い出される。泣かないように、込み上げるものを抑えて、ボクは今できる精一杯の笑みを浮かべて、

「ただいまっ」

おじいちゃんは一瞬、驚いたように目を丸めたが、またすぐあの顔に戻って、ボクに近づく。すると、おじいちゃんはボクの右手を見て、立ち止まった。

「葵、その本は…」

おじいちゃんは、今まで見た事もないくらいに目を見開いた。ボクはそれに少しだけ驚いた。あの表情を殆ど変えないおじいちゃんなのに。

「え、あ…友達から、返すって言われて…」

「友達とは、誰なんだ」

おじいちゃんは、じつとボクの右手…正しくは、右手の中の本を見つめながら、そう詰め寄ってくる。

「ち、知宏っていう男の子…」

途端、おじいちゃんはなっ…と詰まった声を出した。

「あ、葵！それは…本当か…」

切羽詰まったようにおじいちゃんは声を漏らした。おじいちゃんはボクの肩を掴んだ。

「ほ、本当だよ…。さっき、まで知宏くんと居たし…」

ボクは押され気味にもそう伝えた。

おじいちゃんは目をこれでもか、と見開いてボクを見つめた。そして、

そうか、お盆だったな…とか、色々一人で呟いていた。

「…葵、ちよっとついて来なさい」

幾分かして、おじいちゃんはボクの肩を解放してからそう告げた。ボクは黙って頷いて、先を行くおじいちゃんの後ろについた。

おじいちゃんが向かった先は、あの家の陰にひっそりと建つ木製の蔵。今日の朝食の静けさとは変わって、何故かとても緊張する沈黙の間だった。

おじいちゃんは木目が綺麗に浮き立つ、見るからに重そうな扉を片方だけ開いた。おじいちゃんの後に続いて入ってみると、木の匂いが鼻を掠める。

裸電球の明かりが点く。決して明るいという訳ではないが、周りを見渡せる程にはなっていた。

「わあ…、大きい…」

ボクの背の何倍もありそうな天井に、ここでパーティが開ける程の広さ。壁に所狭しと無数の本があの高天井まで続いていた。こんな大きな本棚、初めて見た。きつとこの図書館にもないかもしれない。

するとおじいちゃんは、つかつかと蔵の奥へ進んで行った。ボクは感嘆の声を漏らしながら蔵の中を見回していた。

しばらくすると、おじいちゃんは右手に何か持ち帰ってボクの前までくると、その右手の物を差し出した。

「こ、これは…」

「その本の持ち主が、持っていた本の一冊なんだ」

それは、朱色の表紙に黒猫が真ん中でたたずんでいる本。ボクの右手の中にある本と同じように色が所々はけていて本のタイトルと思われる文字はあの本と一緒に戦前のような字であった。

でも、それより、おじいちゃんの言った、『持ち主』って…。

「知宏、じゃよ」

おじいちゃんはボクの疑問を汲み取ったように言った。

知宏。その言葉がおじいちゃんの口から出てきて、ボクは目を見開いた。一瞬、世界からここだけが隔離されたかのように思えた。

「な、何で。どうしておじいちゃんが、知宏くんの事を」

おじいちゃんは一度、目を伏せて小さく息を吐き出した。

長い間、のようだった。一時間のような感じ、一瞬のようだった。

おじいちゃんが口を開くまで。

「弟なんだよ、知宏は」

おじいちゃんは、その真つすぐな視線をボクに向けて、発した。

弟。誰が。意味が解らない。だって、おじいちゃんはもう七十歳以上で、だって知宏くんはボクと同じ十四歳で…。

「もう五十年以上も前、元々病弱だった知宏はどうとう結核にかかってしまつて、十四歳で逝つてしまつたんだよ。友達も出来ずに、大好きな本を抱いて」

おじいちゃんは、確かにボクを見据えてはいるのに、何故かその瞳は遠いどこかを見ているようで、遠い誰かを想うようで、知宏くんと同じ儂さをまとっていた。

もう、今にも消え入りそうな寂しさをはらんだそのおじいちゃんの瞳は、微かに揺れている。

「八月十五日、今日。今日が知宏の命日なんだ。皮肉にも、お盆の時期で」

ボクはふと、知宏くんの言葉を思い出した。

「みんなが、知らない場所」

おじいちゃんの言った、命日が今日ならば知宏くんが今日行くと言っていた知らない場所は、本当にボク達が知らなくて、ずっとずっと、ここよりずっと遠い場所なんだ。

何だか、とても虚しくなる。今日、ついさっきまで、あんなに近くに触れていたのに、本当は触れることすら、ましてや存在する事すらない

のに。

あまりにも現実味のないこの状況と言葉に、頭が追い付かない。

しかし、本当に知宏くんがおじいちゃんの弟で、もうこの世に居ないのだとすれば、おじいちゃんのこの家を知っていたのも、ボクの名前が墓だと知っていたのも、殆どは辻褄が合う。

だけど、一つだけ。一つだけ解らない事がある。

それは、どうして知宏くんはボクと会つたんだろう。

「どうして…ボクが」

ボクは右手の本を持ち直す。

不意に、込み上げてくる涙に下唇を痛い程噛んで耐えた。

「遊んでほしかったんだろうな。ずっと一人ぼっちだったからなあ」

しみじみといった感じで、おじいちゃんは話した。

ボクはその言葉に俯いた。何でもっとボクから話かけなかったんだろう。何であんな不審な目で見ていたりしたんだろう。何で、何で…。どうしてさよならの一つも言わずに走つて帰つたんだ。

そんな後悔が押し寄せてきて、ボクの目に溜まった雫は流れ出した。今日はもう何度泣いただろう。ちよつと頭が痛いくらいだ。

「知宏もきつと、楽しかったはずだ」

おじいちゃんは最後にそうこぼすと、ボクの頭の上にポンと骨張つたしわしわの手をのせて、蔵を出て行った。

拭つても拭い切れない後悔と涙が胸の奥から溢れ出す。

ボクは膝から崩れ落ちた。コンクリートの床に手を着くと、そこから伝わる冷気が体中を巡つて、まるでボクを責めているような気がして怖かった。

コンクリートの上に落ちる水滴が、コンクリートの色を変える。嗚咽が、だだっ広い蔵に響いていた。蝉の声に紛れて。

その日一日は、涙で真っ赤に腫れた目が痛くて、食事も喉を通つてはくれなかった。

蚊帳の中で一人、また嗚咽をした。ただ、開けた窓から差し月明かりはそんなボクを見守ってくれてるようだ。

何だか、本当にあつという間だった。

窓から、入り込む朝日が、優しく迎えてくれた今日、ボクは帰る。

最初は、こんな田舎から帰れるなんて、凄く嬉しい事だったのに。いっし寂しいなんて感じるようになってしまった。

だけれどどこか、すつきりした自分が居る。

昨日あんなに泣いたからかもしれない。

下へ降りると、おじいちゃんは台所からご飯を持って来ている様だったので、ボクもそれを手伝う。

いつもよりずっと、静かな朝だった。

ボクは朝食を終えると、二階へ自分の荷物をまとめに行った。元々衣類と歯ブラシ程度しか持って来ておらず、しかも、中一の頃の教科書や前の学校の鞆や制服はないから、キャリーバックの中は行きよりずっと少なくて軽かった。

荷造りを済ませると、ボクは再度下へ行き、台所で背を向け洗い物をしているおじいちゃんの後ろに立つ。食器がぶつかり合う音と、水が流れる音だけがその場を包んでいた。

「おじいちゃん」

ボクがそう呼ぶと、おじいちゃんはどうした、と背中越しに問うた。

「ボク、ちよつと出てくるね」

「…早めに帰ってきなさい」

妙な間の後、おじいちゃんは呟くように言った。多分、察してくれたのかな。

ボクは小さく頷いて、玄関へ向かった。

引き戸を開くと、ムワアとした熱気がボクの体を包んだ。蝉の合唱と茹だるような太陽の光の暑さに、小さく呻き声を漏らした。

足は勿論、あの場所へ。

ボクと知宏くんが初めて出会った河原に着くと、ボクはかがんで川の水にあの時のように手を浸した。

こうしていれば、また来てくれるのかな。

叶はずのない想いに、自嘲的な笑みを浮かべる。目を瞑れば、知宏くんの微笑んだ横顔が映される。

あの時から、本当に不思議な子だった。

同じ年とは思えない妖艶な笑みをしたと思えば、あんな無邪気な幼い笑顔をしたりと。全然読めなくて。不審に思ったりもしたけど、年相応の少年だった。

綺麗な顔立ちに、男の子とは思えない華奢な体つき。それに、色素の薄い真つすぐな灰色の瞳。

ボクはゆっくりと目を開いて、また歩き出す。僅かな記憶を頼りに、森へと入る。昨日はあんなに遠い所だと思つたのに、今日は案外早く着いた。真つすぐな一本道だったからかな。

一際大きな大木に寄りかかって座った。そしてボクのすぐそばに、昨日ボクが持って来たみかんの缶ジュースが二本あった。一つはプルタブが開いていて、もう一つは開けられていなかった。

ずっと疑問だった。おじいちゃんは、友達が欲しかったからボクと遊んだって言ってたけれど、何でだろう。確かにそれもあると思うけど、本当はもつとあると思う。

空を見上げる。大木が枝を伸ばし葉を茂らせていてよく見えなかったが、隙間から覗く空の青と太陽の光が綺麗だった。

また、ボクは目を閉じた。

髪を揺らす風が心地好い。蝉の鳴き声も、鳥のさえずりも、全てがボクの心を優しく柔らかく包んだ。

ボクが思うに、知宏くんは助けて欲しかったんだと思う。おじいちゃんを。

五年前、最愛の人を亡くして、ただ広くて大きい家に一人残され、しかも親族も来ずに一人でお盆を正月を過ぎすおじいちゃんを、きつと知宏くんは助けたかったんだ。

でも自分は、もう五十年以上も前に逝ってしまった身。どうする事もできない。

そこで、一昨日。偶然にも自分と同じ年のボクが現れた。

でも見るからに帰りたいようにしているボクを、何とかまた来たいと思わせるようにボクにこの町が良い所だと思ってもらえるように、河原まで誘導した。そう考えれば、導くように河原まで着いた事が解る。

そして知宏くんの言った一人じゃないって言葉は、ボクに向けて言っていた。でも本当は、あの言葉はボクだけじゃない、色んな人に向けて言ったんだと思う。

そう、例えば、おじいちゃんとか。

ずっと、五十年以上も、おじいちゃんを見守っていたんだ。

ボクは下を向いて、目を開けた。

プルタブの開いた方の缶を持って立ち上がると、大きく息を吸った。たった三日。だけど、大きな三日間。

大丈夫、知宏くん。

絶対にもう、一人にはさせないよ。ボクが君のお兄さんを支えるよ。君がボクに教えてくれた、たくさんの事。ボクが君の望みを叶えるから。

「知宏くん」

そう、空を向く。白い入道雲が葉の間からちらりと見える。

「またね」

その言葉に、精一杯の、ありがたみを添えて、空に呑まれた。

何だか、知宏くんがすぐ傍に居る気がして頬が緩む。涙は出なかった。

あの時のように、走り出す。今度は右手に缶を持って。駆け抜ける。

知宏くんが、背中を押してくれているような感覚がした。

河原の近くを通り過ぎる。見えて来る土手に、またボクは微笑んだ。変わらない田んぼと畑がずっとどこまでも続いて行くのを尻目に、ボクは力の限り、走った。

だからもう、家に着く頃はくたくたで。

玄関から、おじいちゃんがボクのキャリーバックを持って出てくる。

「おじいちゃん、たがいま」

「葵、おかえり」

おじいちゃんはボクを見つけると、そう言った。家の前には白の軽トラが留めてある。

もうバスの時間か。時は別れを先延ばしてはくれない。

ボクは軽トラの助手席に座った。おじいちゃんが荷台にキャリーバックを乗せている音が聞こえる。

音が止むと、運転席のドアが開いて、おじいちゃんが乗る。シートベルトを締めると、エンジン音がして車は走り出した。

山を抜け、田んぼが窓の端から端まで続く景色を見ていた。車内は静まり返っていたが、気まずさはなかった。

「葵、着いたぞ」

おじいちゃんがそう言うと、ボクはシートベルトをはずして車から降りる。

久しぶりのようににも思えるあの錆びれたバス停の目印が、相も変わらず寂しく一つたたずんでいる。

おじいちゃんが荷台からキャリーバックを降ろしているのに気付いて、ボクも手伝った。

二人の間の無言の空気が、まだ帰りたくないという想いを駆り立てる。キャリーバックを降ろし終えると、ボクは息を呑んだ。時間が無い。

ちゃんと、ちゃんと伝えなきゃ。知宏くんの想いを、ボクの気持ちで。

「おじいちゃんっ」

ボクは勢いそのままに言うと、おじいちゃんは驚いたように一瞬目を丸

めて、ボクを見た。

無表情なんかじゃない。いつもそう無表情だと思ってたけど、本当はただ不器用なだけで、気持ちをあんまり表に出さないだけ。

だから、誤解されやすい。

おじいちゃんだって、寂しい。一人は誰でも悲しい。人間は、きつとみんなそう。

だから、見つけてあげなくちゃ。その寂しさを、悲しみを。

「おじいちゃんは、一人じゃないよ。明日でも明後日でも、寂しい時はボクが居るよ。毎年、ずっと来るから、ね。だから、だから絶対、元気で居てよ」

知宏くんが、五十年以上も伝えられなかった想いを精一杯紡ぐ。

ボクはそう言い終えると、ぎこちない笑みを見せる。おじいちゃんは依然として目を見開いて固まっていた。

思わず俯く。恥ずかしさで涙が出そうだ。

すると、頭に微かな温かさとしみを感じて、上を向く。

「ありがとうな、葵」

おじいちゃんは、そう言って微かに口角を上げた。今度はボクが目を開いた。あのおじいちゃんの、微妙にはあるが笑った、その笑みが、知宏くんに似ていたようにも思える。

「うん、またね。おじいちゃん」

知宏くん。

その言葉は、喉の奥に押し込んだ。

胸がふわふわとする。優しく包まれるように今、とても気持ちが良い。涙が出そうなくらいに、ボクは笑顔になった。

遠くから、バスのエンジン音が聞こえる。

それと同時に、風がボクの耳を掠めた。

まるで知宏くんが、ありがとうと囁いたように。

夢のようで、幻のようなその日々は、忘れもしないあの夏の思い出。ボクの不思議な、暑い三日間。

